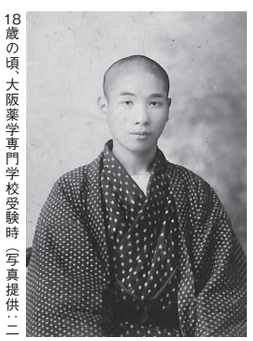
横溝正史　略年譜

本年譜は、『新版横溝正史全集』第18巻（講談社、1975年7月刊）別冊太陽「探偵小説の鬼　横溝正史」（2024年3月刊）ほかを参照し、世田谷文学館で作成しました。今回翻刻した日記の該当年に●印を付けています。

1902年 明治35年	0歳	5月24日、神戸市東川崎に、父・宜一郎、母・波摩の三男として生まれる。父母はともに岡山県の出身。
1907年 明治40年	5歳	母・波摩死去。
1908年 明治41年	6歳	継母・浅恵を迎える。
1909年 明治42年	7歳	東川崎尋常小学校に入学。
1915年 大正4年	13歳	神戸二中に入学。翌年、同窓の西田徳重を知り、探偵小説を語り合う。
1920年 大正9年	18歳	神戸二中を卒業。第一銀行神戸支店に1年ほど勤務。秋、西田徳重が死去、9歳年上の兄・西田政治との交友がはじまる。
1921年 大正10年	19歳	4月、大阪薬学専門学校に入学。処女作「恐ろしき四月馬鹿（エイプリル・フール）」が「新青年」懸賞小説一等に入選。
1924年 大正13年	22歳	3月、大阪薬学専門学校を卒業。実家の生薬屋を手伝う。
1925年 大正14年	23歳	4月、江戸川乱歩にはじめて会い、西田政治とともに「探偵趣味の会」同人として参加。11月、乱歩とともに東京に赴き、多くの探偵作家、翻訳家を紹介される。
1926年 大正15・昭和元年	24歳	6月、初の著書『広告人形』（聚英閣）刊行。9月、博文館に入社し、「新青年」の編集に従事。牛込神楽坂の神楽館に下宿。
1927年 昭和2年	25歳	1月、岡山県出身の中島孝子と結婚。小石川区小日向台町（現・文京区）に新居を構え、父・宜一郎と次弟・武夫を迎えて同居。3月、「新青年」の編集長に就任。
1928年 昭和3年	26歳	2月、長女・宜子生まれる。夏より鎌倉・材木座に翌年3月まで居住。10月、「文芸倶楽部」の編集長に転出。
1929年 昭和4年	27歳	1月、父・宜一郎死去。12月、『渦巻く濃霧』（平凡社）刊行。
1931年 昭和6年	29歳	1月、長男・亮一生まれる。母・浅恵と末弟・博を迎えて同居する。夏、避暑に訪れた千葉県・北条の海岸で最初の喀血。
1932年 昭和7年	30歳	3月、「探偵小説」の編集長に転出。夏、博文館を退社し、文筆業に専念。8月、『殺人暦』（春陽堂書店）、『呪ひの塔』（新潮社）刊行。11月、赤坂の料亭で激励会「横溝正史君の会」が催され、当時の在京探偵作家のほぼ全員が出席。
1933年 昭和8年	31歳	年初に吉祥寺に家を新築し、借家から転居。5月に喀血し、7月から富士見高原療養所に入り、3ヶ月療養。
1934年 昭和9年	32歳	2月、『塙侯爵一家』（新潮社）刊行。春、水谷準が友人を代表して1年間の執筆停止と転地療養を勧める。7月、信州上諏訪に転地し闘病生活に入る。
●1935年 昭和10年	33歳	2～3月、「新青年」に「鬼火」を連載。8月、「蔵の中」を「新青年」に発表。9月、「獣人」を「講談雑誌」に発表、『鬼火』（春秋社）刊行。
1937年 昭和12年	35歳	4～12月、初の時代物「不知火捕物双紙」（講談雑誌）連載。4月、『真珠郎』（六人社）刊行。6月、『夜光虫』（新潮社）刊行。7月、乱歩が本位田準一を同行し、上諏訪の療養先を訪ねて滞在。
1938年 昭和13年	36歳	1月、「人形佐七捕物帳」（～1940年11月まで）「講談雑誌」に連載。10月、諏訪大社の大祭見物を兼ねて乱歩が来訪。
1939年 昭和14年	37歳	3月、『人形佐七捕物帳』（八紘社）刊行。6月、次女・瑠美生まれる。10月、『悪魔の設計図』（八紘社）刊行。12月、上諏訪より吉祥寺の家に引き揚げる。
1941年 昭和16年	39歳	3～7月、『人形佐七捕物帳』全5巻（春陽堂書店）刊行。捕物小説を多数発表・刊行する。
1945年 昭和20年	43歳	4月、親戚・原田光枝の世話で岡山県吉備郡に疎開。8月、同地で終戦を迎える。
1946年 昭和21年	44歳	4～12月、金田一耕助シリーズ第1作となる「本陣殺人事件」を「宝石」に連載。
1947年 昭和22年	45歳	1月～翌年10月まで「獄門島」を「宝石」に連載。9月、『双生児は踊る』（民書房）刊行。12月、『本陣殺人事件』（青珠社）刊行。
●1948年 昭和23年	46歳	1月、『蝶々殺人事件』（月書房）刊行。2月、「本陣殺人事件」により第1回探偵作家クラブ賞長篇賞を受賞。4月、長男・亮一が早稲田大学に入学。8月1日、岡山より東京・成城へ移る。10月、『探偵小説』（かもめ書房）刊行。11月、『殺人鬼』（展文社）刊行。
1949年 昭和24年	47歳	3月～翌年3月、「八つ墓村」を「新青年」に連載。5月、『獄門島』（岩谷書店）刊行。
1950年 昭和25年	48歳	1月～翌年5月、「犬神家の一族」を「キング」に連載。11月～翌年1月まで「八つ墓村」続編を「宝石」に連載。
1951年 昭和26年	49歳	6月～翌年5月、「女王蜂」を「キング」に連載。11月～1953年11月まで「悪魔が来りて笛を吹く」を「宝石」に連載。
1954年 昭和29年	52歳	8月～1957年2月、『金田一耕助探偵小説選』全14巻（東京文芸社）刊行。

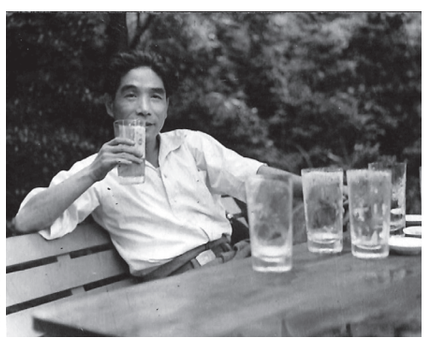
6歳の頃、正史と継母・浅恵（写真提供：二松学舎大学）



18歳の頃、大阪薬学専門学校受験時（写真提供：二松学舎大学）

横溝正史旧蔵・少年冒険小説全集第12巻『渦巻く濃霧』（1929年12月、平凡社刊）

1933年年初に新築したばかりの吉祥寺の家で。左より弟・武夫、長男・亮一、正史、長女・宜子、妻・孝子（写真提供：二松学舎大学）



1949年8月、成城のビアホールにて（写真提供：二松学舎大学）

●1955年 昭和30年 53歳
1月～12月、「吸血蛾」を「講談倶楽部」に、「三つ首塔」を「小説倶楽部」に連載。6月、『迷路の花嫁』（桃源社）刊行。

●1957年 昭和32年 55歳
8月～1959年1月、「悪魔の手毬唄」を「宝石」に連載。

1958年 昭和33年 56歳
6月～翌年12月、『金田一耕助推理全集』全15巻（東京文芸社）刊行。

1959年 昭和34年 57歳
1月、『悪魔の手毬唄』（講談社）刊行。

1962年 昭和37年 60歳
6月、黒沼健、永瀬三吾、渡辺啓助との合同還暦祝賀会が日本探偵作家クラブ主催で開催。継母・浅恵死去。

1965年 昭和40年 63歳
2～6月、『横溝正史傑作選集』全8巻（東都書房）刊行。4月～8月、『人形佐七捕物帳シリーズ』全10巻（講談社）刊行。

1968年 昭和43年 66歳
1～10月、『新編人形佐七捕物文庫』全10巻（金鈴社）刊行。

1970年 昭和45年 68歳
1～10月、『横溝正史全集』全10巻（講談社）刊行。

1971年 昭和46年 69歳
3～10月、『定本人形佐七捕物帳全集』全8巻（講談社）刊行。

1972年 昭和47年 70歳
9月、古稀記念に初のエッセイ集『探偵小説五十年』（講談社）刊行。

1974年 昭和49年 72歳
11月～翌年7月、10年ぶりの新作長篇「仮面舞踏会」も収めた『新版横溝正史全集』全18巻（講談社）刊行。

1975年 昭和50年 73歳
7月、エッセイ集『探偵小説昔話』（講談社）刊行。9月、映画「本陣殺人事件」（監督・高林陽一）封切。

1976年 昭和51年 74歳
3月、エッセイ集『横溝正史の世界』（徳間書店）刊行。10月、映画「犬神家の一族」（監督・市川崑）封切。11月、勲三等瑞宝章受章。

1977年 昭和52年 75歳
4月、映画「悪魔の手毬唄」（監督・市川崑）封切。8月、映画「獄門島」（監督・市川崑）封切。10月、映画「八つ墓村」（監督・野村芳太郎）封切。12月、『真説金田一耕助』（毎日新聞社）刊行。

1978年 昭和53年 76歳
2月、『病院坂の首縊りの家』（角川書店）刊行、映画「女王蜂」（監督・市川崑）封切。

1979年 昭和54年 77歳
1月、映画「悪魔が来りて笛を吹く」（監督・斎藤光正）封切。5月、映画「病院坂の首縊りの家」（監督・市川崑）封切。7月、映画「金田一耕助の冒険」（監督・大林宣彦）封切。

1980年 昭和55年 78歳
7月、『悪霊島』（角川書店）刊行。角川書店が公募による横溝正史賞を設ける（現在は横溝正史ミステリ＆ホラー大賞）。

1981年 昭和56年 79歳
10月、映画「悪霊島」（監督・篠田正浩）、映画「蔵の中」（監督・高林陽一）封切。12月28日、国立病院医療センターで逝去。

1975年11月、成城の自宅庭にて

1976年11月、勲三等瑞宝章受勲伝達式にて（写真提供：二松学舎大学）

海野十三　略年譜

『海野十三全集』別巻2巻（三一書房、1993年1月刊）及び徳島県立文学書道館特別展「生誕一一〇年記念　日本SFの父・海野十三展」図録ほかを参照し、世田谷文学館で作成しました。今回翻刻した書簡の該当年に●印を付けています。

1897年 明治30年 0歳
12月26日、佐野真雄・かずの長男として、徳島本町に生まれる。本名・昌一。双児の弟たちと妹がいた。佐野氏は代々藩主の蜂須賀家に仕える御典医で、祖父の渉は幕末に長崎で蘭学を修め、維新後は徳島医学校一等教授となり、のち医院を開業。昌一は生涯この祖父を尊敬した。

1904年 明治37年 7歳
4月、徳島市福島小学校に入学。3年生の途中まで在籍した。

1906年 明治39年 9歳
父が神戸税関に転職。7月7日、一家で神戸市に転居する。昌一は大関小学校に転校する。

1909年 明治42年 12歳
母・かず逝去。

1910年 明治43年 13歳
4月、第一神戸中学校（通称・神戸一中）に入学。クラスメイトと回覧雑誌をつくる。この年、父が再婚。

1911年 明治44年 14歳
一家は東京に転居。昌一はひとり神戸に残る。

1915年 大正4年 18歳
3月、神戸一中を卒業。上京し、浅草今戸で家族と共に生活する。

1916年 大正5年 19歳
9月、早稲田大学予科に入学。

1919年 大正8年 22歳
4月、本科（理工科電気科）に進む。この年、徴兵検査を受けるが、第二乙種で入営しなかった。

1920年 大正9年 23歳
「野球界」5月号にマンガ「野球狂の神経衰弱」（京人生名義）が載る。6月から無線電信学を専攻。

1922年 大正11年 25歳
1月、旧友・樋口正己らと「早稲田電気工学会会報」編集の学生委員会を発足。8月まで事実上の編集長を務める。8月、早大在籍のまま実習生として逓信省電気試験所第四部に勤務。

1923年 大正12年 26歳
3月、早大を卒業。卒論は「高真空法に於ける余熱操作に就て」。4月、電気試験所に正式採用。無線通信の技術開発に従事。級友の妹、樋口たか子と結婚。9月1日の大震災で浅草今戸の自宅全焼。のち一家で府下野方町新井に転居。

1924年 大正13年 27歳
この頃から「無線電話」等に科学解説の執筆が増える。長女・朝子生まれる。

1925年 大正14年 28歳
7月、電気試験所調査報告として『米国製真空管一般特性表』（佐野昌一名義）を刊行。

早稲田大学理工学部入学当時

右から父真雄、弟佑一、妹美也、十三、義母はつ

1926年 大正15・昭和元年 — **29歳**
1月「無線と実験」に科学童話「ラヂ夫と電子王の話」（栗戸利休名義）を発表。この年、たか子夫人逝去。死因は結核で、昌一も感染する。

1927年 昭和2年 — **30歳**
友人の槇尾赤霧・三苗千秋らと語らって「無線電話」に科学大衆文芸欄を開設し、3月号に海野十三名義で「遺言状放送」を発表。この年（あるいは翌年）、電気試験所で真空管研究室から特許事務担当に転属される。

1928年 昭和3年 — **31歳**
4月、「新青年」に「電気風呂の怪死事件」（海野名義）を発表。7月、「日本少年」に初めての少年もの「地味井先生の秘密」を発表。

1930年 昭和5年 — **33歳**
8月、海野名義のはじめての単行本『麻雀の遊び方』を博文館より刊行。11月、試験所の神崎英と結婚。荏原郡世田谷町に新居を定める。

1931年 昭和6年 — **34歳**
次女・陽子生まれる。11月、「振動魔」を「新青年」に発表。

1932年 昭和7年 — **35歳**
5月、初めての長編「空襲葬送曲」を「朝日」に連載（〜9月）。12月、初めての小説集『電気風呂の怪死事件』を春陽堂より刊行。同月、「新青年」発表のコント「妖説死後の心得」で丘丘十郎のペンネームを使い始める。

1933年 昭和8年 — **36歳**
5月、「赤外線男」を「新青年」に発表。8月、「太平洋電撃戦隊」で「少年倶楽部」に初登場。この年、長男・晴彦生まれる。

1934年 昭和9年 — **37歳**
「俘囚」を「新青年」6月号に、「人間灰」を「新青年」12月号に発表。

1935年 昭和10年 — **38歳**
9月、「無線と実験」主宰のラジオ科学小説懸賞募集の選者となる。この年、次男・暢彦生まれる。

1936年 昭和11年 — **39歳**
弁理士資格を取得。7月『深夜の市長』出版記念会。11月、30年ぶりで生まれ故郷の徳島を訪れる。

1937年 昭和12年 — **40歳**
1月、木々高太郎・小栗虫太郎との共同編集（のち蘭郁二郎も参加）で探偵雑誌「シュピオ」を創刊（〜13年4月）。「十八時の音楽浴」を「モダン日本」4月増刊号に発表。7月、新橋演舞場で「盲光線事件」が上演される。この年、三男・昌彦生まれる。

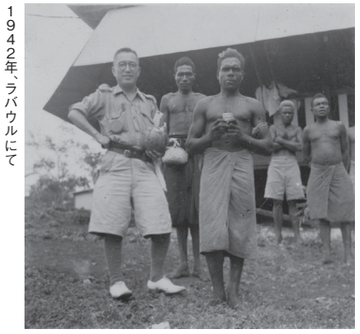
1938年 昭和13年 — **41歳**
1月〜12月、「浮かぶ飛行島」を「少年倶楽部」に連載。3月、初の映画化作品『東京要塞』（監督・清瀬英次郎）が公開2月。また作品がラジオ・ドラマや舞台になるなど、活字メディア外への進出が著しかった。この頃、電気試験所を辞職。芝区田村町に「佐野電気特許事務所」を開く。

1939年 昭和14年 — **42歳**
9月〜翌年12月、「火星兵団」を「東日小学生新聞」などに連載。

1941年 昭和16年 — **44歳**
1月、世田谷区若林の自宅裏に費用1千円を投じて防空壕を築く。

36歳ころ

海野十三・横溝正史あて献呈本『深夜の市長』（1936年7月、春秋社刊）


1942年、ラバウルにて

1942年 昭和17年 — **45歳**
1月1日、海軍省から第1回海軍報道班員として南方派遣を申し渡され、2日、東京駅発。カビエング島攻略に参加し、ラバウルで初空襲を経験。熱帯性の気候で体力を消耗したうえデング熱に罹り、加えて火山灰で肺結核が再発。5月9日、帰還。

1944年 昭和19年 — **47歳**
12月7日、「後日の用のため」に「空襲都日記」をつけ始める。

1945年 昭和20年 — **48歳**
8月6日、広島市に投下された新型爆弾を、「原子爆弾」だと直感。同月15日、一家心中を決意するが果たさなかった。

1946年 昭和21年 — **49歳**
3月〜翌年2月、丘丘十郎名義で「四次元漂流」を「子供の科学」に連載。6月、喀血。

1947年 昭和22年 — **50歳**
2月、公職追放の仮指定を受ける。6月、再び喀血。

1948年 昭和23年 — **51歳**
「怪星ガン」「超人間X号」など少年ものを中心に作品を多数発表。4月、公職適否審査委員会により非該当と決定、仮指定を解除される。9月、呼吸困難と心悸亢進に苦しめられる。夏頃から横溝正史に毎日のように手紙を出す。これは亡くなる当日まで続いた。

1949年 昭和24年
5月17日、結核のため若林の自宅で逝去。享年51。5月23日、告別式。

1950年 昭和25年
4月、木々高太郎監修で『海野十三全集』全8巻が東光出版社より刊行される（〜51年6月）

1962年 昭和37年
3月、〝海野十三の碑を建てる会〟が結成され会報「JU通信」を発行。5月17日、徳島公園内に建碑される。同29日、除幕式が行われる。

1971年 昭和46年
7月、橋本哲男編で『海野十三敗戦日記』が講談社より刊行される。

1988年 昭和63年
三一書房より『海野十三全集』13巻、別巻2巻の刊行始まる。（〜93年1月完）

長女朝子の夫永田哲郎、次女陽子、三男昌彦と、自宅縁側にて

1949年5月23日、海野の葬儀で弔辞を読む江戸川乱歩

謝辞
本誌刊行にあたり、格別のご協力を賜りました関係者の皆様に、深く感謝の意を表します。

協力（敬称略・50音順）
坂井陽子
鈴木江利
関口千佳
野本瑠美
山口直孝

徳島県立文学書道館
二松学舎大学

世田谷文学館　収蔵資料〈調査と探究〉03
横溝正史／海野十三

監修　日下三蔵
翻刻・編集　工藤絵里名　瀬川ゆき　竹田由美　中垣理子　原辰吉（世田谷文学館）
校閲　株式会社尾野製本所 校閲部
撮影　栗原論
デザイン　溝端貢（ikaruga.）
印刷　株式会社 美松堂

発行日　2026年3月31日
編集・発行　公益財団法人せたがや文化財団　世田谷文学館
〒157-0062　東京都世田谷区南烏山1-10-10
Tel.03-5374-9111
https://www.setabun.or.jp

＊著作権等については極力調査いたしましたが、お気づきの点がございましたらご連絡ください。
©2026 Setagaya Literary Museum